

選挙が選挙としての役割を果たすために

都城泉ヶ丘高校1年 大山 祥

「ふだんの暮らしの中で感じる思いや願いを、私たちの代わりに国や地域で実現してくれる人々を選ぶこと」総務省は選挙についてこう定義しています。そして有権者の方々のもつ選挙の認識もこれとほぼ同じはずです。しかしながら、現在の日本でこのような選挙は行われているのでしょうか。私は選挙の問題点がより深刻化しており、社会の理想とする選挙の在り方から少しずつ離れているように感じます。代表的な問題点には若者の政治離れや一票の格差などが挙げられますが、最も影響の大きいのは日本の投票率の低さではないかと思います。

私は高校1年生です。学校では一年に2回、生徒会長の選挙が行われます。「演説、公約、投票、任命。どれも自分たちがいつか体験する本物の選挙を模して面白いなあ」投票をする際、ふとそう思いました。しかし、そう思うと同時に違和感を感じました。「社会でする一般の選挙の過程と同じはずなのになぜ政治における選挙と同じように投票率の悪さが問題にならないのだろう。」自然な流れで持った疑問でした。私は二つの理由があるのではないかと考えます。

一つ目の理由は、生徒達にとって選挙が大変身近にあることです。学校という小さく限られた生活環境において、自分たちの判断で学校生活が変化するという認識を皆が持っているのだと思います。つまり、「いかに選挙が生活に影響を及ぼすのか」について生徒一人一人が十分理解しているのです。しかし、社会の選挙について理解するのは難しいといえます。選挙のたびに自ら興味をもってメディアをのぞいてみたり、政治について調べる中で引がかかった専門用語を調べたりすることが必要になります。選挙やそれに立候補している候補者、政党などについてすべて調べ上げ、知識を身につけるには手間がかかりすぎます。そうなると政治に関して疎くなったり、選挙に行かなくなったりします。よって若者の選挙離れは深刻になっているのではないのでしょうか。例えば

スマホ片手に投票できるようになるなど、選挙が簡略化されれば、選挙に対する苦手意識を取り除くことができ、私たちの暮らしに身近な行事にすることができるのではないかと思います。

二つ目の理由は、生徒達は候補者が演説をする様子を直に見ることができるからだと思います。私の学校では立会演説会という全校生徒が集まって候補者の演説を聞く行事があります。そこでは放送などでする演説とは違い、直接聞くことで候補者の意図や情熱が鮮明に伝わってきます。そして演説が終わるとこのような光景が見られます。「あの人の演説面白かったね。」「あの公約は実現性がなさそうだよね。でもこの公約は実現しやすそうだし役に立ちそう。」こんな会話をすることができるのも一つの優れた側面なのではないでしょうか。一つの行事を仲のいい友達と同じ場所で体験することで、選挙が自然と日常の会話に入り込んできてその会話の中で自分の考えや思いを発展させることができます。実際の選挙ではこれをする機会がほとんどないような気がします。実際、選挙の期間になると、演説を聞いてから投票するまでを一人で完結させていることが選挙の知識や投票する意欲が低くなってしまふことにつながっているのだと思います。そんな結果を招かぬように街頭演説には友達や知り合いなど複数人で足を運び、自分がそれを聞いてどう感じたのかちょっとしたディベートを試してみるのもいいのではないのでしょうか。

55.93%。この数字は令和5年に行われた衆議院議員選挙の投票率です。これは有権者の約半分程の票しか集まっていないということになります。

「ふだんの暮らしの中で感じる思いや願いを、

私たちの代わりに国や地域で実現してくれる人々を選ぶこと」。

再度選挙の定義を確認して今の選挙が十分この定義を満たしていると思えるでしょうか。私はまだまだ改善の余地はあると思います。そのためには先ほど挙げたように選挙が身近なものになるように政府が新しいものに作り変える一方で、私たち自身が選挙

に対して前向きにかかわっていくことも大切です。そして選挙が選挙としての役割を果たせるよう、私たちは今に目を向けなくてはなりません。